

PHD

PEACE, HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT

LETTER

83

2002.6

- フォローアップレポート . . . 3P
- 研修生レポート . . . 4-5P
- ソディ通信 . . . 6P

PHD運動とは1962年より約20年間、ネパール、東南アジアを中心とした発展途上国で医療活動に従事した岩村昇博士の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの10パーセントをささげて、平和づくり (Peace) 健康づくり (Health) を担う人材をつくる (Human Development) 運動を世界中にひろめることを目的として、1981年からはじまりました。

発行：財団法人PHD協会 理事長 今井 鎮雄
編集人：藤野 達也
住所：〒650-0022 神戸市中央区元町通5-4-3
元町アーバンライフ202
TEL 078-351-4892 FAX 078-351-4867
E mail : phd@mb1.kisweb.ne.jp
U R L : <http://www.kisweb.ne.jp/phd>
定 価：100円



ビルマ、ヤンゴン郊外 撮影 FUJINO. T

エーヤワディデルタにある村へ
雨季なので道はぬかるんで歩けない。
かわりに小舟で行き来する。
薄日が差す中、風が心地いい。

東西南北
問題解決
取組日記

誰が必要とする援助なのか (1)

5月×日

ビルマの野党指導者アウン・サン・スー・チーさんが解放された。私たちはこれまでこの国から5人の研修生を迎えてきた。この間、スー・チーさんはほとんど自宅から出る事はできなかった。現政権のこの動きを受けて日本の政府は政府開発援助の停止を解除することにし、まずパルーチャングダムへの資金を提供することを決定した。これまで現政権のあり方が人権抑圧など問題有りとみなし、一部の人道的援助以外は欧米諸国と足並みをそろえて、ストップしてきていた。ところが、この間に諸外国の援助及び投資が少なく、困った現政権を積極的に支援してきたのは中国。日本政府はこの状況に対し、早期援助再開を願ってきていた。そこでのスー・チーさんの解放。

この支援が本当にビルマの人々の生活に役立つものであれば、嬉しいのだが、今一つ不鮮明。私たちの税金をもとにした年間約1兆円弱のODA予算の全てをチェックすることはできないが、今年、PHDは5年ぶりにビルマからの研修生を迎えている縁からも、ここには特別関心を払っていききたい。鈴木宗男さんの功績というか、ODAの使い道に不透明さが存在することを多くの市民が認識した。前号の本欄でも触れたが、こういった関心を広めていくこともNGOの役割の一つだと思う。

誰が必要とする援助なのか (2)

5月〇日

今年もインドネシア、西スマトラ州から研修生を迎えているが、お隣のリアウ州にまたがる地域に日本のODAによってダムが作られた。ところがこのダム建設に対して、立ち退きをさせられた住民が日本政府とその計画を立てた企業を相手取って裁判を起こそうとしている。ダムの名前はコトパンジャン。昨年日本に支援組織ができ、関西でも集会が

持たれている。今年の研修生ミミさんたちの村から一日の距離での出来事、無視はできない。

建設後5年たった今も、発電量は計画の15%にすぎない。貴重な熱帯の自然を水没させ、さらに約5,000世帯、23,000人が移転を強いられた。移住先は農業にはむかず、事前の説明とは異なる困難な生活となっているという。地域住民の生活が良くなることを支援するのが協力であるのなら、現状は好ましいとはいえない。PHDがおつきあいする周辺での問題については、直接関われないとしても、情報を得て、お伝えしていきたい。マスメディアが取り上げないこと、政府が伝えたくないことを、草の根ルートで流すこともNGOの役割。

PHDはどんなNGOを目指すのか

5月△日

日本では多くのNGOは大きな組織とはいえない。だからやれることも限られている。しかし活動をすればする程、取り組むべき課題が多く、広範囲にわたることが見えてくる。そこで同様の思いをもつ他のNGOと組んで、足らずを補ったり、情報や経験を交換して効果を高める工夫をしている。PHDもいくつものネットワークに加わっている。神戸NGO協議会、関西NGO協議会、関西国際交流団体協議会、開発教育協議会、兵庫県有機農業研究会、ひょうご市民活動協議会や海外災害援助市民センターなどがある。

それらに加わって考えるのは、PHD協会というNGOはどんなNGOなのかということ。何をいまさらといわれるかもしれないが、特によく課題となる政府系の支援とのつきあい方を検討する際に考える。国際協力を行うNGOの最終ゴールは世界の人々がみんな平和で健康に暮らしていけることに違いないだろうけど、その状態へのもっていき方や、どのような条件によってそれが実現されるのかについては大きな違いがある。私たちは限られた地球という場所に住んでいるのだから、その資源はおのずと限界がある、前の時代から受け継いだものを後に残しつつ、今に生きる人々にできるだけ不平不満が

ないようにすること（これは同じく、等しく、とは違うだろう）。そうではないから、何とかしたいと活動する。この時に今の世の中の成り立ちを前提とするのか、その前提にこそ原因があるのではと疑ってみる立場もあると思う。例えばPHDはアジアの村に貧困が存在するケースに対して、金や物を配るのではなく、自らがそれを得られるように支援をする形をとっている。しかし、彼らの地域の努力だけでは解決しない原因がある。それは自然条件以外に村を取り巻くその国の状況であったり、その国を取り巻く外国の影響であったりする。そうすると村の貧困を解決しようとした時に、その対象地だけを見るのではなく、周囲の原因を取り除くことが必要となる。国際社会は正の関係でつながるばかりではなく、負の関係でつながることがあるのだ。そこに私たちが日本の中で生活をしていても、外国の地域につながっている、もしくは関わることがあるといえる。前のところで記したODAを良くすることも、日本の中で働きかけることだろうし、今の経済体制の中の私たちの消費を考えることだって当てはまるだろう。NGOの試行の積み重ねが、より好ましい効果のある方法への取り組みなのかもしれない。コツコツと村人を支援することは直接的なものとしては、インパクトが少ないように見えるが、そこから得られる経験、情報を大きくワクを揺さぶることにつなぐ、私たちの毎日の生活＝行動に結び付けることが日本に住む私たちの役割だと思う。問題があることに対して、それを解決するために今の常識で対処するのではなく、根本的なところを疑ってみる、世の中の成り立ちを見直してみる。ここを突くこともNGOの一つの役割ではないだろうか。

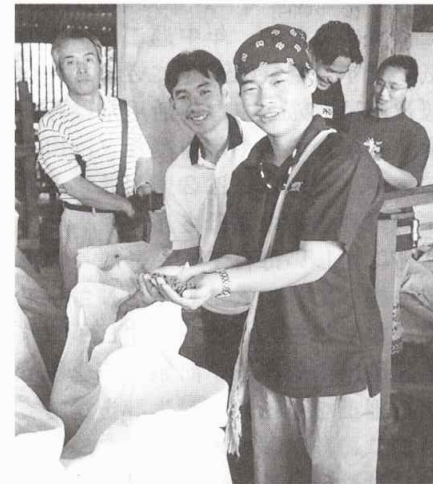
多くを生産して、多くをさばくために努力し、それによって多くを稼いで、その余裕を楽しむのも一つ。だが一方でほどほどでいくという手もあるのでは。必要に足らずに対しては補う工夫がいるけれど、過剰は不要。国の内、外で考えていきたい。

総理事代行 藤野達也

今年度はこれまで以上にフォローアップを強化するという計画をあげている。その第一弾として農業研修の指導者の渋谷富喜男さんと同行を願い、職員2人と共にタイへ出かけた。渋谷さんは神戸市西区で野菜を中心に有機農業をしておられ、91年度から、PHDの研修生の指導をお願いしてきている。昨年9月にはインドネシア西スマトラ州タベ村で帰国した研修生のフォローアップをしていただくとともに、現地の状況を見ていただいている。

今回は帰国したばかりの19期生ナロンデッさんとケユーンさんが日本での研修を地

域の農業振興の活動にうまく生かせるように助言をすること。また、彼ら2人に加え、カラシン県からの以前の研修生ワラヤさん、サウェーさん、ノバドンさんたちのケアとともに、現在スリン県で生活する元職員小松みちさんとそのお連れ合い松尾和彦さんの協力を得てスリンの農業開発を学ぶ、国内研修旅行を実施した。スリンでは開発僧として著名なナン和尚の話聞き、自然農法を実践するチアンさんを訪ねた。これまでも北タイとカラシンの研修生の相互交流は実施してきたが、今回はそれをさらに拡大する形となった。



有機肥料の作り方を見る
左から渋谷さん、ノバドンさん、ナロンデッさん、サウェーさん、小松さん

タイは暑い国だった。一年で一番暑い時期に訪れたのだから他の時期のことはわからないけれど、この暑さの中では、水牛を田に放して昼寝でもしているのが理にかなっているのだろう。牛達は一日中、田の中や畦の草刈りをやってくれる。肥料(牛フン)も入れてくれる。東北タイの地平線の彼方まで延々と広がる水田には、草が生い茂っているところは見当たらない。乾期というだけでなく、牛が草を食べてしまったという感じがする。あと1ヵ月余りすれば雨が降って田植えが始まるのであろうが、いつでも植えられる準備はできている。

自然農法の農園を訪れた時、その老農園主が語っていたが、タイの土壌は本当はもっと軟らかかったのだ。化学肥料を多く使うようになって固くなってしまった。昔のように有機物を使う農業を

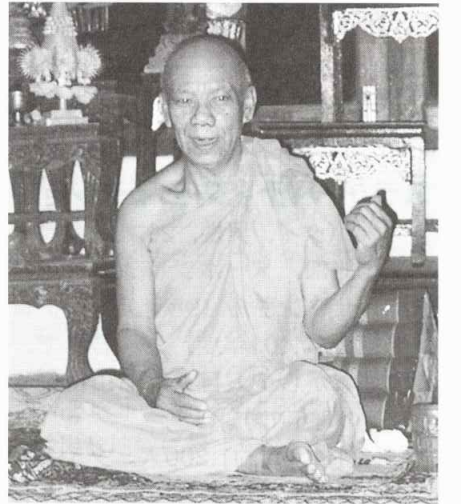
取り戻さないとダメだと。PHDの研修生には、日本で学んだことがどれだけ役に立っているのか、タイの昔から続けられた農業も勉強すべきだと言っていたが、その通りであろう。バムルンさん(89年・短期研修生)のグループの有機農業の実験農場では、伝統的に作られている落花生や豆やハーブ類の生育は良かったが、胡瓜

フォローアップ
レポート
2002.4 タイ

や里芋の生育は良くなかった。灌水はしているようだが、暑さと干ばつに水が足りないようだった。この乾き切った暑い時期にどれだけ豊富に水が使えるかが問題のように思う。牛フンやもみガラを中心にした堆肥は良くできていた。この暑い国では堆肥の醗酵はスムーズに進むはずだ。最終日にバンコク郊外にある日本のNGOが中心になって始めた有機農業の農場を見た時、不毛の土地で



ノバドンさんの家で村の農業について話し合う
中央アムナット村長、その右ケユーンさん



サーマッキー寺の住職、ナン和尚

あった所が今は緑の土地に変わっていた。ニワトリを草の生えた畑に放して草を食べさせる方法もおもしろかったが、土の表面に堆肥やワラや雑草を厚く敷いていく方法に興味深かった。固かった土の表面は軟らかくなっていたし、適度な湿りもあった。日本のように冬のないこの国では、堆肥を多く作って土の中に入れるよりも、土の表面に有機物を厚く敷く方法が良いのではないかと思った。労力も少なく済むし、土の乾燥を防ぐこともできる。

それぞれの国には、その国の農業のやり方がある。それは、気候や土壌の条件によって長い歴史の中で確立されて来たものである。私達の農業が、この国でどれ程参考になるかわからない。PHDの研修生には、日本の農業は機械化されて楽なように映るかも知れないが、借金をして機械を買わなくても、彼らの国の農業の方が楽な部分が多くあることがわかった。両方の国の良い部分を見つけて、うまく工夫していけば良いのだと思う。

このツアーに参加して見たことや、わかったことを今後の研修生に会った時に生かせたらと思う。トラックの荷台から見た広大な農地で人が働いているところをもう一度見たいと思いながらこの暑い国を後にした。

渋谷富喜男

20期生

4月10日から11日にかけて来日した20期生3名は、体調を崩すことなく元気に日本語研修を終えました。5月末からはいよいよそれぞれの関心に合わせた現場研修が始まりました。ダルミアティスさんは洋裁、保健衛生、スラチさんとスウェウィンさんは有機農業や農機具の修理・メンテナンス等を中心に研修を進める予定です。

スラチ・パティスティンさん (タイ、男性、29才)

タイ北部、メーホンソン県ペー村出身。サワンさん(98年度)、ナロンデッさん(01年度)と同じ村で、この地域から7人目となる山岳民族カレンの青年です。

ペー村は人口約1,200人。タイ人の家は数軒で、村人のほとんどはカレン人です。5年前から村に電気がきており、テレビ、冷蔵庫など電化製品の普及がかなり進んでいます。



スラチさんのステレオ、炊飯器、テレビ

奥さんと2人の子ども(3才と1ヵ月の女の子)の4人家族。仕事は農業で、自給用の米以外には、大豆、ニンニク、ピーナッツを換金作物として作っています。鶏も自給用に数羽飼っています。カレン人の多くがそうであるように、スラチさんもクリスチャンです。

この地域には6年程前から農業や化学肥料が入ってきており、ほとんどの村人が正しい使用法や危険性に

ついての知識がないままそれらに頼りきった農業になってしまっています。スラチさんも「化学肥料を使い過ぎると土が悪くなることや農薬の危険性は知っているけれど、年に2~3回使わなければなかなか上手く作れない」と話しています。農薬の使用を誤り、手足の肌がボロボロに荒れていたり、亡くなった人がいるなど状況は深刻です。

滞在家庭

大友安夫さん・史子さん宅(西宮市) 「とにかく色々なものを食べてもらっています」とは初めてホストファミリーを引き受けられた大友さんのお母さん。「みそ汁や刺し身はまだ苦手で、カレー、鶏肉、魚は好き」という具合にスラチさんの好みがわかってきました。

物静かですが、独特のユーモアを見せるスラチさん。最近はテレビの前で「サカナ、サカナ、サカナ」と歌っているそうです。



庭先に全員集合

スウェウィンさん (ビルマ、男性、23才)

マンダレー近郊のイエボ村出身。タダインシェ村から1992~96年度にかけて5名の研修生を招いてきました。帰国した研修生のグループと協議の上、彼らの自立した生活改善への取り組みを支援するためには活動の拠点を拡大することが有効だと判断し、タダインシェ村から約8km離れたイエボ村よりスウェウィンさんを招くことになりました。

イエボ村は人口約1,400人。調理には薪、生活水は井戸、電気はなく、

灯りはローソクを使っています。村では米、豆類、バナナ、ゴマ等を作っていて、牛は3頭、鶏は12羽程飼っています。この地域でも古くから農業、化学肥料が入ってきましたが、特に95年からは軍事政権下の農民に



首都ヤンゴンには神戸の市バスが...

研修生レポート

ダルミアティス(通称ミミ)さん (インドネシア、女性、30才)

西スマトラ州ソロ郡タベ村出身。タベ村からはダスウィルさん(99年度)、アフダールさん(00年度)、アルウィさん(01年度)に続く4人目で、初の女性研修生です。

タベ村は人口約2,500人。イスラム教徒がほとんどです。標高約1,100mに位置するため、年中過ごしやすい気候です。電気は97年にきました普及率は数%。主な生活用水は井戸水ですが、洗濯や水浴びなどは川でします。ミミさんは2児(5才と3才の女の子)のお母さん。家事と子育てに忙しい毎日ですが、時々お菓子を作って村の人に売ったりもしています。ご主人がサトウキビから作る黒砂糖や唐辛子、河原の石を使った石細工を売ることによって生計を立てています。



標高1,100mに広がる棚田

村に診療所はなく、役場に月1回町から医者や看護婦が薬を届けてくれるだけです。また、病院で出産する人は少なく、多くの場合はドック

ン(伝統的な産婆さん)の助けを借りて出産しています。不衛生な環境や葉不足のため母子共に死亡率が高いのが問題です。

ミシンは村に4台ありますが、とても古くその内2台は故障しています。学校等で洋裁を勉強する機会がないため、ほとんどの村人はミシンの使い方や服の作り方がわかりません。

滞在家庭

山岡哲雄さん・真理子さん宅 (神戸市西区)

オーストラリアからの留学生は受け入れた経験のある山岡さん一家ですが、インドネシアからの研修生は初めて。

「電気、水道、ガスのない村から来たミミさんにとって日本での生活がどう映るのかなーと思います。ミミさんの村の話を知っていると、いつもお金や物に振り回され慌ただしくしている日本とどちらが幸せなのかわからなくなります」ミミさんと1ヵ月暮らしてみたお母さんの感想でした。



お母さん、ベロと一緒に

皿洗い等よく手伝ってくれるのでお母さんは助かっているそうです。「些細なことでも『ありがとう』と云ってくれるのがうれしい」と話して下さいました。



地域のだんじり祭りにて

19期生、元気に帰国しました! -フィリピンC.O.ツアー報告-

1年間の研修の総まとめであるフィリピンでの比較研修旅行。今年もサフルディ(PHDのカウンターパートNGO)による地域組織化(Community Organizing)の実践を学び、エディさん(99年度)をはじめとする帰国した研修生の活動を見るため、3月8日から10日間程ルソン島のヌエバエシー八州を訪れました。

「村の問題は(自分の出身地域のそれと)似ているところが多かった。そして、その原因が世界経済や先進国の思惑に左右されていると初めてわかった」「サフルディのグループには若い人から年をとった人まで入っているのが良いと思った。グループ作りの方法や大切さが勉強できた」

~フィリピン帰国研修生短信~

エディーさん(99年度)

牛とヤギと鶏の糞を混ぜた堆肥を使い、色々な野菜(トマト、カボチャ、ニガウリ等)や水稲を完全有機栽培しています。平飼い養鶏も順調で、肉が90ペソ/kg(普通は60ペソ)で売れるそうです。ワラやコングラス(家の屋根に使う草)でマルチにしたり、くん炭を作って追肥にしたりと日本で学んだことを堅実に実践に移しています。

現在は村のチーフ・ポリスマンを受け持っていて、村で問題が起こると仲裁や裁きも行っているそうです。



エディさん一家

ミノさん(96年度)

玉ネギにはまだ農業、化学肥料を使用していますが、稲は全て伝統品種を有機栽培で作っています。ヤギ

等、研修生たちは、有機農業に取り組む農民グループや手工芸品を作る女性グループのメンバーとの話し合いを通じて多くのことを学びあうことができました。

終盤軽い鼻カゼをひいた人はいましたが、それを除けば無事にプログラムを終了でき、マニラからそれぞれの出身地域に帰っていきました。



エディさんからC.O.について話を聞く

15頭、水牛3頭を飼っていますが、「家畜の世話で精一杯で畜複合型の有機農業はなかなかできない」とのこと。

田畑へ水をくみ上げるポンプを動かす発電機をミノさんが持っているため、持っていない村人の田畑に有料で水を流す仕事も4年ほど前からしています。

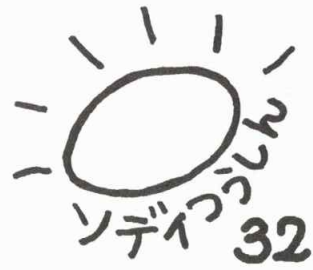
ヨリーさん(93年度短期)

平日は村のデイ・ケア・センターで子供たちの面倒を見て、週末は農作業(玉ネギ)で忙しくしています。

ヨリーさんの村が政府に開発のモデル地区に指定され、女性を対象にしたグループ作りが進められているそうです。ヨリーさんもそのメンバーに入っています(全25人)。キャンディー、塩漬けの魚など食料品作りが活動の中心だそうです。



ミノさんの家族とヨリーさん(左端)



改めて思うこと

3月に19期研修生が訪問したフィリピンの村にもNGOが行っているクラフトのプログラムがあります。1990年にこの地域に大地震が起こり、灌漑設備が破壊され、村人の収入源である農業が大打撃を受けました。そのため農業以外で収入を得る方法を考える必要があったことから始まったものです。

製品は村のメンバーとマニラからやって来るデザイナーで話し合い、買い手の嗜好に合ったデザインを考えます。価格に関しては何時間働いて何個できるか、運送代はいくらかかるか等を計算して決めます。注文が入ると、誰がどれだけ作るのか等を話し合うミーティングを開きます。1週間に1回、土曜日に商品の提出日があり、質のチェックを受けた後

代金を受け取ります。彼らのほとんどは農業で生計を立てており、収穫の時期が来なければ収入が入ってこない状況の中で、週に1回のこの収入は日々の食費や学費に充てることのできる重要なものになっています。

また、彼らは売上げの15%をグループに入れて、事務所の電気や水道代、交通費などの運営費に充てていますが、その中には努力をしてもあまりたくさん作ることができない人への補助金が含まれています。



3月はシーグラスを使った枕作りの最盛期

PHDのカレンの布グループが目的に向かって安定した活動を続けていくためには、メンバーがグループの目的を理解しているということが大前提ですが、定期的な注文と、商品と引き換えの支払いが重要であるこ

とをフィリピンのこの活動を通して改めて感じました。

今年の展示販売会

4月18日から30日までカレン布展示販売会をJR神戸駅の地下街デュオ神戸にある「ふれあい工房」で行いました。年末に買い付けてきた布を中心に、洋裁の指導者である芦田安紀子さんが布を使って作って下さったエプロン、のれん、かばん、コースター、スカーフなどの加工品も展示販売しました。特に人気があったのが、のれんとコースターでした。のれんは織りの良さを一番引き出せる加工品です。カレンの草木染めは日本の四季に合う色合いで、水色を基調としたかすり布で作ったのれんは「これからの季節にぴったりね」と大好評でした。カレンの人の伝統的な布を使い日本の四季を楽しむのもおもしろいのでは。コースターはちょっと変わった形が目を引きました。興味のある方には作り方をご紹介します。ご希望の方はご連絡ください。



伊藤 公男

私は業務上、事務所にいることが多かったのですが、事務所に来てくださるたくさんの方との出会いがありました。その半面、各地でPHDを応援して下さる方々にお会いすることが少なかったのが心残りです。しかし直接お目にかからなくても、みなさんのPHDやアジア・南太平洋への熱い思いを常に感じ、それに支えられ、勇気づけられて丸5年間働いてきました。20周年記念行事はそうしたみなさんの思いの素晴らしい結晶であり、その機会に立ち会えたことに職員としての幸せを感じています。

今秋より1年間、アメリカで非営利団体の経営について学ぶ機会を得ることができました。これもPHDでの経験があったからこそ。みなさんからのいただいた力を基にさらにこの分野でよい働きができるようにがんばっていききたいと思います。本当にありがとうございます。

お世話になりました

この春、人事異動がありました。事務局長と総務・財務担当者が退職をしました。その2人から一言。

山西 一平

「共に生きる弱きものと」「生きるとは分かち合うこと」と1998年にPHD協会にお世話になりはじめてから4年の間、私はこの岩村先生のメッセージを正しく理解し、実践に移すことができただろうか。ややもすれば「誰々のために」といった思い上がりの気持ちはなかっただろうか。「為にではなく共に」だと頭では十分に理解していても気持ちは「為に」になっていた事はないだろうかと反省しています。

「援助」という言い方がありますが、これは「～の為にしてあげる」であると思います。一方、「協力」はまさに「一緒にやりましょう」です。「協力は」「人の交わり(交流)」から生まれてくるものだと思います。人は「交流」することによってお互いのことが解り、そして、お互いの違

いを理解できるようになると「一緒にやろう」という気持ちがおこってきます。PHD協会の活動はなんといっても「交流」が根本です。一人一人が一個の人間として交わり、お互いの学びあいを大切にすることの活動に、短い間ではありましたが、参画できた事に感謝の気持ちで一杯です。

今の私達の生活に最も大切でありながら、最も欠落しているもの「共に生きる姿勢」を大切に生活している研修生達に会って教えられる事がたくさんありました。これからは立場を変えてPHD協会の活動に皆様と一緒に参加させていただきたいと思っています。「善意から一歩踏み出した協力」を目指して。

在任中はたくさんの方々との交わりの中で、楽しく活動に従事する事ができました。皆様方のご協力とご支援に心から御礼申し上げます。

よろしくお願いします 4月から新職員が2人加わりました。

寺田 栄 (29才・兵庫県加古川市育ち)



神戸市にある頌栄人間福祉専門学校国際福祉科在学中にPHD協会とタイの研修生の村で実習を行う。横浜でひとつ大学を卒業し、しばらく仕事をし、再度の学生生活を経て。村で覚えたタイ語も役立つ。主に研修を担当。

佐々木拓次郎 (35才・山梨県甲府市育ち)



PHDには久々の東日本系。理系の学校を出て、メーカー勤務2年後、東京の老舗NGO、日本キリスト教海外医療協力会で8年。その後日本教職員組合勤務を経て、当会へ。業務だけでなく、地理、言葉に始まる異文化体験の日々。総務、財務を主担当。

夏にPHDのTシャツはいかがですか?
人気の唐辛子 色:白,紺 値段:1500円
PHDのロゴをシンプルに 色:グレー,紺 値段:1500円
水牛も継続販売中 色:白,紺 値段:1500円
パプア・ニューギニアの写真プリントしました。 色:白 値段:1800円
お問い合わせ、ご注文はPHD協会まで

PHD NEWS

◆会費・ご寄附寄託状況

Table with 3 columns: Month, Number of items, Total amount. Rows for Feb, Mar, Apr, and a total for 4 months.

以上の通り、多くの皆様より会費とご寄附を頂戴しました。ご協力に厚くお礼を申し上げます。また、同封のチラシにありますように会費納入に一層のご協力をお願いいたします。

◆理事の就退重任

5月13日開催の第50回理事会において、辻井博氏が退任され、新たに山田一成氏が就任、残る8名の役員は重任となりました。新理事会は以下の通り。理事長今井鎮雄氏、理事岩村昇氏、森滋郎氏、金光清行氏、神木董氏、森本章夫氏、米谷収氏、山田一成氏、監事齋藤貢氏。

◆ホームページ完成、E-mailアドレス変更

ついにホームページを立ち上げました。定期的に情報を更新し、研修生の紹介、イベントのご案内など、情報を発信していきたいと思ひます。皆さん、ぜひご覧いただき、ご意見、ご感想をお聞かせ下さい。また、これに伴い、E-mailアドレスを下記に変更いたしました。 URL: http://www.kisweb.ne.jp/phd E-mail: phd@mb1.kisweb.ne.jp

◆林業体験宿泊「枝打」夏の陣

今年も大山振興会、ウータン・森と生活を考える会との共催により、来たる7月6、7日に第12期「枝打」を行います。篠山市大山地区の野草刈りの作業を通じて、日本の林業の現状や課題を学びます。20期生3名もそろって参加しますので、お誘い合わせの上、ご参加下さい。

○月×日のPHD協会

職員 古本 これまで雨が降ったことのなかった芦屋駅前のアースデーのバザー。テントを張っての雨天決行。横なぐりの雨に大苦戦。

職員 佐々木 ケータイと言えば電話。しかし、この人にとっては電池式扇風機。仕事の一区切りごとに一週し。小松に次ぐ2代目汗かき王。

職員 藤野 タイ出張5日目、半日くたばる。心当たりは、扇風機による寝冷え、屋台で食べたタガメ、前日の生の豚、それとも犬の煮込み?

職員 納堂 酷暑のタイへ出張。移動のトラックの荷台でゆられて、コンガリ焼け、雨期の到来を告げるスコールで熱冷まし。

職員 芳田 最近、近所に新しいごはん屋さんオープン。おかず3品、味噌汁、お漬物に、ポイントはごはんおかわり可。お昼で一日分の栄養を。

職員 寺田 事務所の模様替えを画策中。限られたスペースに20年の蓄積と机を配置するには新人の旧配置への思い入れのなさが必要不可欠。

以上、家が事務所に近い順。

◆国内研修生一名、募集

海外の人材のみならず、国内にも平和と健康を担う人を育成しようと95年から実施している国内研修生制度。内容: PHD協会の事業を通じた実地研修。1.海外研修生の研修業務を軸とする実践 2.国際理解・開発教育など国内に向けた啓発活動 3.公益法人における組織運営 対象: 日本国内居住者、日本語のやりとりが可能で、将来、教育・福祉・開発協力などの分野で働くことを志す方。当会事務所に通勤可能な方。研修日程: 週3~5日(10月から6ヵ月間)、3月にフィリピン研修有。時間: 午前9時~午後6時を原則とする。支給経費: 研修手当および交通費。選考: 書類審査後、筆記、面接を行います。締め切り: 9月5日 詳しい案内をお送りします。お問合せ下さい。

編集協力: 奥西能彦、横山千朝